

中国漢代の羌（五）

——生態学的辺境と民族的境界——

王 明珂（柿沼陽平・訳）

【解題】

本稿は、台湾中央研究院歴史語言研究所研究員・中興大学歴史学系講座教授兼文学院院長の王明珂氏が一九九二年に米国ハーバード大学に提出した博士論文 *The Chiang of Ancient China through the Han Dynasty: Ecological Frontiers and Ethnic Boundaries* の第五章と結論部分の日本語訳である。第三章以前の部分の訳稿は『早稲田大学長江流域文化研究所年報』第三〇五号（二〇〇五～二〇〇七年）、第四章の訳稿は『史滴』第三三三号（二〇一一年）で発表した。本訳稿が最後となる。

第五章 羌とは誰か・理論的考察

前章では、羌の概念がいかに形成されたのかをのべた。すなわち、漢人は羌を西方の民族的境界として概念化してい

た。漢人という巨大な民族は、殷代～漢代に形成された。そして彼らが次々に西方の人々を自己の民族内に取り込むのに伴い、西方の民族的境界はさらに広まり、甘肅回廊（四川・チベット・河湟の境界地域）にまで達した。

羌人史に関する本稿の立場は、他の研究者のそれとは大いに異なる。ここでいう他の研究者は、次の二つの立場のいずれかを採用している。すなわち、漢代羌人を殷代羌人（河南西方から河湟地区へ移住）の子孫とみるか、それとも殷代に河南西方からチベットへと広く分布していった人々（東方に残った彼らの一部は徐々に中国化した）とみるかである。前者は移住理論、後者は汎羌理論とみなされる。本章では、なぜこれらの羌人に関する理論が受け入れたいのかを説明する。そして漢代羌人に関する歴史的研究の背後に存在するもつと根本的な疑問を検討する。すなわち、我々は上記諸研究におけ

る民族単位をいかに定義すればよいのか。

『後漢書』における羌人の起源

羌人史を学ぶ上でもっとも重要な史料は、間違いなく『後漢書』西羌伝である。本史料は、羌人の起源に関する三つの段落を含む。それは、中国古代の伝説の王と羌の邪悪な性格とを関連づけつつ、羌人の起源から語り始める。

西羌の本は、三苗自り出で、姜姓の別なり。其の國、南岳に近し。舜、四凶を流すに及び、之を三危に徙す。河關の西南の羌地、是れなり。

彼らの経済的・社会的生活に関する概説に続いて、新しい段落が始まる。そこでは殷・戦国時代の戎の歴史が叙述されている。それはつまり、中国の全ての戎が華夏諸国によって淘汰され、生き延びた戎人が汗水と隴山を越えて西方へ脱出するまでの歴史である。また以下のような別の逸話もある。

羌の無弋爰劍は、秦の厲公の時（前四七一―前四四四）、秦の爲に拘執せられ、以て奴隸と爲る。爰劍の、何の戎の別なるかを知らざるなり。後に亡げ歸るを得たり。而ち秦人、之を追うこと急なれば、巖穴の中に藏れて免るを得たり。羌人云う、「爰劍、初め穴の中に藏れ、秦人、之を焚くも、景象の虎の如く有り、其の爲に火を蔽い、以て死せざるを得」と。既に出でて、又た剽女と野に遇い、遂に夫婦と成る。……遂に俱に亡げて三河の關

に入る。諸羌、爰劍の焚かるも死せざるを見、其の神なるを怪しみ、共に畏れて之に事え、推して以て豪と爲す。

史料はこの後も続き、爰劍が部族民に農耕・牧畜を教授したこと、爰劍率いる部族がいかに増加したかをのべる。そして彼の孫である忍の在世期間中に、部族は分裂したとする。

忍の季父印、秦の威を畏れ、其の種人・附落を將いて南し、賜支河曲の西に出づること數千里。眾羌と絶遠し、復た交通せず。其の後子孫分別し、各自種を爲し……或いは燭牛種と爲る、越冒羌是れなり。或いは白馬種と爲る、廣漢羌是れなり。或いは參狼種しんろうしゅと爲る、武都羌是れなり。忍及び弟舞、獨り湟中に留まり、並びに多く妻婦を娶る。忍は九子を生みて九種と爲り、舞は十七子を生みて十七種と爲る。羌の興盛、此れ従り起る。

本史料の撰者（達）は、三苗の伝説と、戎の歴史と、無弋爰劍およびその子孫の歴史との関連性を曖昧に捉えている。どうやら撰者（達）は『史記』匈奴列伝の記述に従っただけのようである。すなわち、本史料と匈奴列伝の間には構造的な類似性が看取され、匈奴列伝は次の四点を含む。（一）中国古代の伝説上の王と関連する匈奴の起源、（二）彼らの経済的・社会的生活に関する概説、（三）戎人史、（四）頭曼単于率いる匈奴部族民の歴史。

もっとも、西羌列伝は戎と羌人の関連を示唆するものの、

戎は最終的に「其の遺脱者は皆な逃走し、西して汧・隴を踰ゆ」とされ、羌人の祖先の無弋爰劍は「爰劍の、何の戎の別なるかを知らざるなり」とされている。よって西羌伝を完全に信頼する研究者にとつて、残る課題は、西羌列伝のしめす枠組みをふまえ、関連資料との整合性を鑑みつつ、いかに持続的な羌人史を再構成するかとなる。以下の節では、かかる研究がいかに進められてきたのかをみたい。

羌人研究のいくつかの定見

羌人研究にはしっかりとした基礎がある。本課題に関するもつとも有力な諸見解を概説するにあたり、ここでは最初に顧頡剛の諸研究を引用したい。顧頡剛は代表的な中国史家で、一九二〇年代に伝統的歴史家達に挑んだ疑古派の領袖であった。羌人史に関する彼の見解は次のごとくである。

- (1) 羌人の特徴と姜の一枝のそれは同じものである。よつて姜族シヤンと羌人は同じ民族集団エスニツクグループであった。
- (2) 殷代において、羌族は殷の西方にいた敵であった。武王征商時に、羌族は周の軍内で重要な役割をはたした。
- (3) 周の領域内で、中国化した羌族（有名な姜族を含む）は華夏となり、それ以外の羌族は戎となった。
- (4) 春秋戦国時代に、中国国内の戎は華夏諸国に征服され、遠く西方に住んでいた羌族のみが自らの文化と民

族意識を保持できた。後者は漢代に羌族と呼ばれた^⑥。よって顧頡剛によれば、羌族や戎の名は、複数の集団よりなる巨大な民族集団を意味した。それは、殷代甲骨文にみえる羌、殷周時代の姜族と戎人、そして漢代の羌族である。この見解は許倬雲によってさらに明瞭化された。

結論として、羌人は殷代以来、地理的に広範に分布し、現在の甘肅から河南西部に広がる地域で生活した。羌方とよばれた本集団の人々は殷族の中心の近傍に住んでいた。中でも渭水流域に割拠し、周の密接な同盟国となつた一部の羌は羌姓を用いた^⑦。国家として組織化されることとなつた彼らは、『左伝』で羌戎と呼ばれる人々に違いない。新石器時代の生活水準をもつ彼らは、羌人の祖先の甘肅寺洼文化の人々で、漢代の文献にもそう記録されている^⑧。

この見解（すなわち汎羌理論）は必ずしも顧頡剛と許倬雲のみが提唱したものではない。むしろ本課題を研究する多くの代表的な研究者がこのことを指摘している。たとえば中国人研究者の傅斯年・馬長寿・李紹明や、西洋人研究者のブリーブランド^⑨、日本人研究者の白川静などである^⑩。

先行研究の中にも厳密にいわば違いはある。だがこれらには数点の共通性もある。第一に、そもそもとも基本的な共通点は、西羌が広い時代・地域にわたって、「羌」とされた人全員を含む民族集団である（あつた）ことである。

第二に、以上の先学は、羌の広範な地理的配置を大規模な移民の結果とみなす傾向がある。つまり甘肅・青海は羌の本拠地で、羌はそこから中国全土へ何度も移民していったとされる。たとえば馬長寿は、羌が中原へと先秦時代に三、四回、漢代に六回移住したとする。冉光榮などは大人数の羌が西周時代に中原へ流入したとする。白川静もこのような移住理論を提唱するが、彼の場合は移民の流れを逆向きに捉える。すなわち白川静は、漢代河湟羌の祖先を戎とする。そして戎は春秋戦国時代に華夏諸勢力の圧力によって、まず陝西省西部（甘肅省東部の山岳地帯へ移動し、秦の勃興後に遠く河湟地域へ移動したとする。¹⁶）さらに一般的な羌族遷徙のモデルが傅斯年によってしめされている。すなわち傅斯年は、中国に流入した羌は華夏化し、本拠地に残留した羌は夷狄のままであったとする。¹⁷

第三に、一部の研究者はまた、歴史上の羌を、現代ないし古代に実在した多様な人間集団と言語的、文化的、もしくは血縁的に関連するものと捉えようとしている。たとえばブリーブランドは羌をチベット・ビルマ諸語系とし、何炳棣は前チベット系とし、鄒衡は辛店・寺洼文化を古代羌人の遺したものとす。²⁰

たしかに、殷代甲骨文中の羌は、殷周時代の姜族と一部重なり合うところがある可能性がある。戎とされた人々の一部が、漢人が羌とみなす河湟人と文化面で重複した可能性もあ

る。また、彼らが各地に移動した可能性や、漢代羌人の一部が戦国戎の生物学の子孫だった可能性も排除されない。しかしこれらの見解には本質的な弱点があり、それゆえこれらの見解には賛同しかねる。それは、上記諸説が一般に「民族単位を歴史的にどう定義するか」という決定的な疑問点を等閑視していることである。

歴史学における民族単位

前掲諸研究にみられる民族単位の「羌」の本質とは一体何か。見られるとおり、羌に関する先行研究の中で、いかなる人間集団が「羌」と名付けられたかを検討しようとしたものはほとんどない。むしろ羌について検討する際に大半の研究者は、以下の想定を含むステレオタイプに基づいて民族集団を定義してきたように思われる。

(1) 漢文史料にみえる族名をもつ人々とはみな同じ民族単位に属する。よって、空間的に河南西方から河湟へ、トルキスタン東部から四川西部へ、時間的に殷代から漢代、そして現代へと拡散していった全ての羌は単一の民族単位である。大量の移民とその子孫が時間的・空間的な羌族の広範な分布を物語る。

(2) 民族単位は文化的単位でもある。同一の民族単位に属する人々は、同一の文化的要素（言語を含む）を共有している。よって民族の由来は、考古遺物や文字史

料を通じ、当該民族の文化的特色を辿ることで同定されうる。

(3) 漢文史料に基づき、非漢人の民族形成史を再構築することは可能である。それは客観的史実（非漢人自身さえ知らない史実をも含む）をしめすものではなく、

これらの前提を検証するにあたり我々は、民族集団に関する類似のステレオタイプが一九四〇年代以来、社会人類学において厳しい批判に直面してきたこと、そしてそれゆえに一九六〇年代末期に民族現象に関する研究分野で理論的革命が起こったことに注目すべきである。この論争は現在もおお継続中であるが、これは間違いなく、膨大な民族誌の資料と三十年以上にわたる議論をふまえた本分野の研究者達の共通基盤をなしている。⁽²¹⁾ 民族現象に関するこの共通基盤は以下の議論の一助となる。

民族呼称の意義

まず最初の想定「民族呼称をもつ人々とは同じ民族単位に属する」の是非を検討しよう。この想定は、その民族呼称が内名（人々が自分達を同定するために名付けた名前）だった場合には妥当である。一方、民族呼称が外名（外部者が特定の間集団を呼称するために創造もしくは使用する呼称）だった場合にはそうではない。ある人々が自分達を名指すのに使用し、他者もそう認める呼称の場合、それが民族の一員の証として重要

かつ便利であることは、人類学者には広く認知されている。⁽²²⁾

またそのような呼称はしばしば「人間」の語と同一視される。逆に、集団Aが集団Bを名指すのに使用する呼称で、かつそれが集団B自身の使用しない呼称である場合、それはしばしば集団Bが劣った存在、もしくは非人間的存在として集団Aに認識されていたことを示唆する。⁽²³⁾ つまり外名は、「これらの人々がいかなる存在か」をしめす一方で、「我々とは異なる人々」に対する観察者の観念をしめすのである。

漢代において、民族呼称の羌は間違いなく外名であった。一般に認められているように、漢人が羌と呼ぶ人々の内名を明らかにするのは容易でない。しかし当時中国西方（トルキスタン東部・四川西部）にかくも巨大な民族集団が存在し、彼らが羌と自認していたという証拠はない。前章では、地理学的もしくは人口学的な「羌」という呼称が漢人の拡大過程の中で、「誰が漢人か」を定義づける民族的境界とともに西漸していたことをしめす史料を豊富に挙げた。

もしこれらの証拠がまだ十分に説得的ではないとしても、他にも次のような証拠がある。第一に、たとえ河湟原住民の内名が未詳だとしても、三世紀の甘肅省南部に住んでいた氏は「盍稚」と自称したことが知られる。既述のごとく、氏・羌の名はともに同様の民族的・地理的呼称に由来した。もし氏が内名でないとすれば、それは漢人が羌とみなす人々にとっても同様であろう。その上、現在の四川北部にはその実例が

存在する。すなわち、四川省北方の羌族（中国にいる五十五の少数民族の一つ）にとつて、羌の語は外名で、彼らの内名は「Ma」なのである。

羌の語は外名なので、漢代のトルキスタン東部から河湟、四川西部にいたる膨大な人々をふくみうる。彼らの中には、文化的・政治的な紐帯も多少はあったかもしれないが、彼らが全ての意味で一つの民族集団であったという証拠はない。

民族単位と文化的単位

次に「民族単位は文化的単位でもあった」とする想定について検討する。これは大まかには事実をいいあてたものかもしれない。しかし一九六〇年代の社会人類学の民族性エスニシティに関する議論をふまえた研究者にとつては、この簡略化された一般の見解はもはや十全でない。この文化的内容によつて民族集団が同定されるとする議論に挑むため、ここではすでに人類学者達の共通の土台となつている数点の理由だけでも挙げておく必要がある。第一に、一つの文化的基準によつて画定される単位はそれ以外の要因によつて画定される単位と必ずしも合致しない。第二に、文化の違いのみに注目しても、しばしばグラデーシヨンのような多様性をしめす諸文化間の違いを全て明らかにすることはできない。²⁶その上、文化的特徴の中には差異をしめす表象・象徴として用いられるものと、無視されるものがある。²⁷ある状況下では文化的差異が意図的

に強調され、別の場合はそれが意図的に隠蔽される。よつて文化的特色とは、民族集団の構成員が一般的に共有する何かではなく、むしろイアン・ホッターが指摘するように、人々が民族意識を主張する特定の状況下で、その論理構造の必要部分として用いられる。²⁸

本稿の論点に即していえば、先行研究者はつねに、陝西西部の姜族・戎と甘肅 青海の羌との間に密接な民族的紐帯があったとする考古学的証拠を強調する。たとえば先周文化の考古学的研究の中で鄒衡は、二種類の鬲があったとする。一つは器底に離れた足が付いているもの。もう一つは器底に合体した足が付いているもの。鄒衡はこの二種類の鬲を、起源を異にする二民族の風格をしめすものとする。すなわち、後者は姫姓周人の遺物、前者は姜族の人々の遺物だ、と。鄒衡はさらに離底鬲を寺洼文化のもの、寺洼文化を羌の遺跡とし、それゆえ渭水沿いの姜族は考古学的に甘肅—青海の羌と関連するとする。²⁹

この議論には反論を招きかねない箇所がある。すなわちここでは、考古遺跡の遺物に対する誤解があり、いくつもの歴史学的誤りが含まれる。だがここではとりあえず民族単位と文化的特色との関連性のみ注目する。この点からみると、鄒衡のアプローチは以下の理由で非常に疑わしい。第一に、同一の民族集団の人々が必ずしも同形器物を使用するとは限らない点と、同形器物を使用する人々が必ずしも同一の民族

意識を有するとは限らない点は、すでに長きにわたる裏づけがある^{②③}。よって、民族的分類が土器分類と同一だとする本質的理由はない。

第二に、一つの文化的基準（たとえば離足器）により画定された人間集団は、それ以外の文化的基準により画定された単位とは同一でない。よって、他の遺物を基準とした場合、いわゆる先周文化は他の地域文化と関連を持っていたということになる可能性が極めて高い。

最後に、二つの隣接する文化間にはつねに、いくつかの面で類似性があり、またいくつかの面で差異がある。つまり、もし鄒衡の論理を容認した場合、隣接諸地域間の似通った文化的要素を次から次へと結びつけることで、羌の範囲は青海から山東半島へと拡大されかねない。広い地域におよぶ言語と文化の持続的多様性の存在は、諸民族誌の中で、よくみられる現象として記録されている^{②④}。もしこのことで人類学者が、民族の諸存在を切り分けて考えるのが困難だと感じるならば、考古学者も同様の問題を抱えていることになるであろう。

たしかに人々は文化的な諸特色を用いて自らの民族アイデンティティを主張する。しかし全部の文化的要素が民族アイデンティティの主張に利用されるわけではない。また、必ずしも全ての人々があらゆる状況下で自分達の文化を形作るものを強調せねばならないわけではない。たしかに窮地に陥った場合、民族の団体意識を宣揚するため、もしくは合理化する

ために、文化的因子の存在が利用されることもありうる。ただし考古学的には、どの遺物が民族意識を宣揚するのに用いられたのか、そしてそれがどのような人々によって、どのような社会的文脈の中で利用されたかを特定するのは困難である。要約すると、民族単位は必ずしも文化的単位もしくは言語的単位ではない。民族の由来は、文化的特色、考古学的遺物、もしくは史料を通じて疑問の余地なく同定、もしくは痕跡を辿ることのできるものではないのである。

羌の民族形成のすがた

ここで第三の想定「羌人達本人がそれを知っていたか否かはともかく、漢文史料によって羌の民族形成史を再構成することは可能である」の検討に移ろう。

この想定の確からしさは二つの点で疑わしい。第一に、羌が中国古代の漢人の描く集団分類にすぎず、当該分類の人口学的・地理学的内包が不確実である以上、その起源を摸索する努力はすべて無駄となるろう。というのも、一体誰が実体なき民族集団の起源を探りうるというのか。

第二に、民族形成史^{エスノジェネシス}に注目する羌研究の有効性を疑うに足る、もつと複雑な理由がある。一般にいわれているように、歴史研究における民族形成史一般は、民族集団を、その身体的・文化的特徴（たとえば人種、言語、習俗、服装、宗教、土器生産等々）に基づいて客観的に定義された分類とみるもので

ある。これらの客観的特徴に従って研究者は、人々の歴史学的、言語学的、もしくは考古学的な「起源」を辿ることが可能かもしれないと信じている。これによって羌を、前チベット、もしくはチベット＝ビルマ語系とみているのである。そして殷周時代の羌、もしくは辛店や寺洼文化の人々は漢代、現代の羌の祖先として描かれるに到ったのである。³³⁾

既述のごとく、民族単位と文化的単位は必ずしも一致しない。現在研究者は一般に、フレドリック・バースに従って、民族集団が自分自身による認識・同一視に基づく分類であるということを確認している。一部の研究者が全民族形成史（起源神話、口承史、系譜、部外者による言い伝え）を主観に基づくものとし、「似非歴史学的」と信じる理論的背景はここにある。

よって、クリフォード・ギアツによると、人々の間に同一性を感じさせる血縁は、実際には「想定される血縁」である。³⁴⁾ マックス・ウェーバーによれば、民族集団がもつ共通の祖先は、実際には「客観的信仰」である。³⁵⁾ この考え方はエドモンド・リーチによってさらに明瞭な形で表現されている。カチン族の民族形成史について検討する中でリーチは、カチン地域の中心で首領が多くの政治的連合関係を有し、それゆえ当該地域における首領の系譜が極端に長いことを見出した。しかし他の地域では、首領の政治的連合関係の人数はもつと少なく、彼の系譜はそれに伴ってもつと小規模なものとなつて

いる。それゆえリーチは次のように重要な点を指摘している。すなわち、「私見では、カチン族系譜はほぼ排他的な構造的な理由によって維持されており、歴史的事実としての価値は全くない」と。³⁶⁾

同系統の理由に基づき、次のような考えを懐く研究者もいる。すなわち、起源神話はそれを有する人々が自らを定義づける手段である、と。この観点はチャールズ・F・キイスによって最も正確に指摘されている。

民族アイデンティティの象徴とされる文化的特色なるものは、神話的祖先および（もしくは）歴史的先祖の経験・行動に関する解釈に依拠している。これらの解釈はしばしば神話や伝説の形で表現され、その中で歴史的出来事は象徴的意義を与えられる。起源神話は時に、いかに人々の祖先が地方性ローカリティと連動し、それによって地方性が民族的本拠地ホムランドと同一視されているかを教えてくれる。³⁷⁾

民族形成史の歴史学的意義を等閑視するこの視点は、必ずしもつねに妥当であるわけではない。ここで二つの民族形成史を切り分けてみてみよう。第一に、原住民の信じる民族集団の起源を表象するイーミツクの民族形成史。既述の共通の先祖、系譜、起源神話は結局はみなこれに分類づけられる。第二に、特定の人々の起源に関する外部者の見方を表象するエティックの民族形成史。

民族関係を合理化するイーミツクの民族形成史の機能的意

義は、既述のとおりである。換言すれば、イーミック的民族形成史は「我々は誰か」について主張するものである。もっとも、これらの民族形成史の逸話は似非歴史学的であろう。

しかし民族集団に関する歴史学的研究においては、その価値を無視することはできない。社会人類学者は、研究対象である人々の中に入り、彼らの民族的愛着を聞くことができる。

史料の中でイーミック的民族形成史を展開することで、歴史家は古代人に対して同様の質問をすることができる。⁽³⁸⁾

他方、エティツクの民族形成史は「彼らは誰か」をあらわし、あるいは「彼らはなぜ我々の一部ではないのか」を合理的に説明するものである。明らかにエティツクとイーミックの場合、民族形成史が暴露するのは必ずしも「史実」ではない。民族形成史的物語の機能は、過去に何があったのかを描写するよりも、むしろそれ以上に重要なことに、一体どのよう⁽³⁹⁾に人々の現時点での性格が生まれたのかを主張すること、もしくは現時点での民族系統^{エスニツクシステム}を合理的に説明することにある。それにもかかわらず、民族関係の中で利益を得るために、民族形成史は捏造され、利用され、中傷され得た。この状況はさらに民族形成史の似非歴史的性格を強めた。

これは羌の場合も同様である。ここで『後漢書』西羌伝所見の羌の起源に関する記載を読み返してみよう(一二三参照)。本稿では、歴史家が羌人史(第三の民族形成史)の再構成のために、いわゆる考古資料との組み合わせを通じて、いかにこ

れまで文字史料の中で史実と思われる箇所を見いだそうとしてきたのかに言及してきた。しかしこの資料は別の角度からも検討できる。

注目すべき第一点目は、この史料には、じつは羌の民族形成史について二つのヴァージョンがみえることである。一番目は、羌と三苗(伝統中国における悪者)、そして姜族(殷周時代の西方の漢人で、漢文史料中では半野蛮人的存在とされる)を結びつけるものである。これは明らかにエティツクの民族形成史に属する。すなわちこれは漢人の目からみた民族形成史であり、それによって漢人はこれらの人々の性格がどう生じたのかを説明した。この伝説は羌のイメージを表象する。それは漢魏晉時代の漢人の眼に移る、黒い羊としての羌、もしくは「家族の黒い羊」というイメージである。

羌の創始者(無弋爰劍)とその子達に関してはもう一つ別の逸話がある。それによると、すべての羌は無弋爰劍の末裔である。彼らは一五〇種に分かれ、四川西部の参狼、白馬、旄牛が含まれる。しかし同一の史料には、四川西部の羌は河湟地域の羌と何の関係もなかったとも書いている。また本稿第三章で検討した河湟羌の種族名・個人名の命名方法は、西南の羌にはみられない。とはいえもつとも重要な点は、それが歴史学的に妥当か、それとも虚構かはともかく、以上の民族形成史が、全羌がたった一人の祖先にまで遡ることを主張している点である。これによれば、少なくとも無弋爰劍を祖

とみなす者達よりなる民族集団が存在したとわかる。この民族集団は羌と呼称される集団とは必ずしも合致しない。この逸話は、羌に関する伝説をふまえて漢代の漢人が書き上げたものと思われる。しかしこの民族集団の範囲は漢人にとつての羌人概念に合致するように再構成された。

漢文史料にはこれ以外にもさらに別の羌に関する民族形成史の逸話がみえる。二回にわたる大規模な羌の反乱後（二〇七年～二一八年、二一九年～二五〇年）、羌は西方中国に広く分散させられた³⁹。その後（混乱期の魏晉南北朝時代）、中国北西に対する中華帝国の支配力は低下し、辺境外からの非漢人集団の移民により、当該地域の民族のモザイク化が進んだ⁴⁰。民族間の力学が重大問題となったのはこのような状況下においてであった。多くの地方指導者が漢人・非漢人を問わず、同類の人々のみならず異種の人々とさえ合体する目的で、自らの民族意識を利用しようとした。たとえば著名な羌の一族として南安の姚族がいる。漢文史料より、この一族が自らを焼当羌の末裔で、伝説の有虞氏もしくは舜の子孫でもあると主張したことが知られる⁴¹。姚族の羌人は自らを夏后氏⁴²（上古三代最初の王国の王）だと主張した。羌族の別種である鉗耳の人員は周室姫姓の末裔だと考えた⁴³。

これらの民族形成史を検証する試みは従来なされたことがない。理由は単純である。「史実」に拘泥する歴史家達にとつては、これらはあまりにも信じがたいものだからである。し

かしこれらは、民族形成史の似非歴史学的本質をしめす好例だと思われる。またこれらの羌に関する民族形成史は、民族意識がいかに個人的利益を満たすのに利用されうるかをしめす端的な例ともなりうる。その上、筆者は、姚・黨・鉗耳が本当に羌であったか否かには懐疑的である。なぜなら、羌人は中国の伝説上の王・聖人の子孫だと自己主張した段階で、もはや羌ではないからである。これは中国史上の民族変化をしめす完璧な一例である。

以上の諸議論は、まとめると次のことをしめしている。第一に、民族集団は文化的、言語的、もしくは人種的な点に「起源」をもち、それが時代を下つてゆくといいものではな。むしろこの集団は特定の経済的・政治的環境の中で形成され、その境界は集団間もしくは集団内部の人間関係を媒介として形成される。第二に、史料にみられる民族形成史に関する逸話は、それがエティツクの視点に基づくものであろうと、イーミツクの視点に基づくものであろうと、必ずしも史実を反映している必要はない。むしろそれらはしばしば似非の歴史を反映している。これらの民族形成史に関する逸話が暴露しているのもっとも重要なことは、「過去」ではなく、「現状」なのである。これら二つの理由により、似非歴史的资料から歴史家が再構築した「真実の民族形成論」の意義は疑わしい。

本章ではこれまで、民族集団の性質に関する一般的なく

つかの仮説を、羌人の研究に関連付けつつ、検討してきた。羌人史に関する誤釈の大半は、過度に単純化された民族集団の概念より派生したことは明らかと思われる。しかし豊富な民族誌的資料を通じて人類学者は、民族集団に関する客観的説明を疑い、民族アイデンティティを主観とみるようになる傾向がある。それによって自己同定に用いられる原住民の呼称は民族の一員たる重要な証とみなされ、文化的要素(言語・宗教や、服装・ボディペインティングから入墨に及ぶ文化的外見など)は社会的交流の中で民族アイデンティティの主観的宣言とみなされる。最後に、イーミック的民族形成史とよぶ、起源に関する原住民の信仰は、民族意識の象徴的な証だと信じられている。羌の事例を通じて明らかにしてきたように、民族の一員たる証としてのイーミック的民族形成史は、さまざまな目的を抱く人々に利用され、でっちあげられ、ねじ曲げられかねない。

羌人とは誰か・河煌の場合

本稿ではこれまで、新石器時代後期～漢代の河煌地域における環境の変化の過程について検討した。羌という族名がいかに漢人によって「我々とは異なる西方の人々」の意で用いられてきたのかについても検討してきた。それによると、漢人の民族意識が西方へと拡大した結果、羌の人口学的・地理学的な内包も西漸した。その上、羌に関するすべての誤解は、

民族集団に関する誤解に由来するとも指摘した。以上をふまえ、ここでは最後の疑問に答える必要がある。すなわち、羌とは誰か。彼らはいかにして羌になったのか。

河煌羌の創造には三点が含まれる。(1) 河煌の人間エコシステムの形成、(2) 漢人の形成史の一部としての、中国の民族的境界の西漸、(3) 河煌人―漢人間の交流。

第一に、新石器時代後期～漢代に河煌で起こった人間生態に関する一連の変化は、最終的に、河煌人と東方人との間に経済的・社会的差異をもたらした。

第二に、巨大民族の漢人の形成が同時並行的に進行した。彼らがつと多くの西方人を自民族内に受け入れる一方で、古代漢人は自分たちの民族的境界の西方(羌という族名の境界)を甘肅回廊、四川―チベット間の境界、河煌地域まで移動させた。

第三に、西暦二〇〇年までに、河煌住民と漢代漢人の間で一連の衝突があった。詳細は漢文史料に記録され、膨大な記述がその社会的・政治的意義の説明に費やされている。ここでこれらの研究を再度繰り返す必要はない。しかし次の一点は注目に値する。すなわち、甘肅回廊と四川西方の住民はしばしば漢人から羌だとみなされていたが、彼らと中国との関係は、河煌羌と中国との関係とは無関係である。また漢人と甘肅回廊・四川西部の羌人との間には、河煌羌―漢人間のごとき暴力的対立はなかったとわかる。よって、河煌原住民は

明らかに漢代羌人の母体となったわけであるが、その主因は、彼らが中国内の西方へとむかう全集団との間で集中的に交流していたからである。

最後に、主観によって定義されうる羌人もいた。漢人と交流するようになってから二〇〇年後の魏晋南北朝時代（二二〇年～五八一年）に、羌の移住民は広く中国西方に分散していた。彼らは自らの村に定住していたが、非漢人アイデンティティを失ってはいなかった。彼らは民族呼称としての羌を容認するか、少なくとも自分達がそう呼ばれることを容認していた。⁽⁴⁶⁾同時に彼らは、漢人の習俗と文化（言語、中国仏教、民族的教義など）を受容した。⁽⁴⁶⁾これらの中国化された羌の中で、民族呼称としての羌は徐々に内名化していった。⁽⁴⁷⁾だが彼らは、羌としてのアイデンティティを自己主張したものの、中には自分達と中国古代の王・聖人とが結び付いていただろうとする民族形成史観を有する者もいた。すなわち、有虞氏・夏后氏の末裔たる羌だ、と。民族意識を客観的に主張する視点よりみると、彼らはもはや漢代の羌であった。

結 論

論文題目にしめされているように、本稿ではこれまで、羌について二つの次元で検討してきた。河湟地域の生態学的辺境の形成と、漢―河湟羌間の民族的境界の形成である。

河湟地域がそれ以西の世界にとって生態学的辺境となったのは、新石器時代後期―漢代の人間的生態の一連の変化に端を発するものであった。本稿では考古学的遺跡を用い、これらの生態学的変化について検討してきた。紀元前三千年頃（仰韶農耕文化が当該地域に移動した時期）に、河湟地域の馬家窯・半山・馬廠文化の農民達は定住的生活を開始した。彼らはブタを育てながら小麦を栽培し、大勢で土器を大量生産した。だが、農耕文化のさらなる発展は、河湟地域の地形と標高による制約を受けた。かくて齊家文化期後の人々は徐々にブタ飼育をやめ、草食系家畜を愛好するようになり、彼らは膨大な大型土器を所有するものもあきらめ、個人用の小型裝飾品を愛好するようになっていった。最終的に、かかる定住的生活はさらなる遊牧的生活を胚胎した。かくて前五〇〇年後に河湟地域は、それ以西の世界とは対照的に、生態学的辺境になったのである。

東方の場合、巨大民族（漢人）の形成は遅くとも殷代には開始され、漢帝国に至ってもなお進行中であった。本稿ではこれまで、外名の羌が「西方野蛮人」の意を帯びつつ、いかに漢人―西方非漢人間の民族的境界として機能してきたのかを検討してきた。漢人が殷代―漢代に西漸するとともに、その民族的境界も西漸した。

最後に、この民族的境界は漢人の目からみると「生態学的辺境」にまで達しており、よって河湟人は羌の名を帯びた形

で中国史上に出現したものとみられる。これらの人々は基本的に草食系家畜の飼育を生業とし、それゆえ頻繁に移動することが必要であった。彼らの社会組織は柔軟化する傾向があり、「分散的」と特徴付けるのがもつとも妥当であろう。漢人は当地へ到達するや、そこに彼らと全く異なる世界を発見した。河湟人は漢人という巨大な政体に対面し、あるいは漢と盟約を結ばざるをえなくなった。漢人側もまた「王」による支配なき河湟人を一体どう扱えばよいか見当も付かなかつた。そのような葛藤を経て、漢人は駆除策を講ずるに到つた。そのような血まみれの闘争が起こつたがために、河湟原住民は漢人から羌の母体とみなされるようになっていったのである。

これより、羌の形成について論ずる場合、我々は実際には漢人の形成を論じているのだとわかる。これは、羌を長い歴史をもつ民族集団で、あるいは現代にさえ至るものと信じている研究者にとつては、いささか驚くべき結論かもしれない。だが私見によれば、たつた今のべたことは非常に合理的なものである。というのも、民族集団は生物学の子孫によつても、客観的な文化的特色によつても裏づけられていないからである。代わりにそれは、二つ以上の人間集団をふくむ民族関係もしくは集団内部で創造される。よつて他の民族集団なくして、ある特定の民族集団の形成を論ずることはできない。

最後に二点強調したい。漢人の形成問題について、多くの

研究はこれまで、漢人間の多様な文化的もしくは身体的特色の「起源」を追つてきた。しかし民族集団とは認識・同一化の分類であるとの見解を受け入れた場合、これらの全研究は不十分となり、自己認識の次元に関する研究によつて補充される必要が出てくる。つまり質問はこうである。自己認識による漢人の形成をいかにたどりうるか。おそらく羌の事例はそのヒントとなろう。すなわち、中国古代人にとつての他者性を表象する外名（夷、戎、蛮、氏、羌など）は、漢人の民族境界を叙述・維持・改良する上で非常に重要である。よつてこれらの外名と、それと合致する内名に関する系統的研究は、漢人形成に新しい光をあてるものとなろう。

強調したい第二の点は、民族形成史が民族の一員たることを主張するのに重要なことで、それ自体の本質が非歴史的事実なことである。たとえ歴史家が羌の起源を再構築できると認識したとしても、これはエティツクの民族形成史の一種にすぎないであろう。たとえば四川西北部にはまだ羌と公式認定されている八万五千人とその二十倍のチベット人がおり、漢人は彼らを殷代以来の古代羌の末裔だと信じている。しかし「羌人」は地元では「*qiang*」と自称しており、はるか以前に起こつた戦争の勝者の末裔だと自認している⁴⁶。よつて、漢人イデオロギーの受容度に応じて、ある者は大戦争の勝者の末裔「*qiang*」となり、ある者は古代羌の末裔の羌となつていくことである。またチベット人（中国語で藏族）は古代羌の子孫

だが、彼らは「Bod（聖なる猿の子孫）」と自称している。⁴⁹よって彼らは状況に応じて藏族となったり、Bodとなったりする。それは彼らが独立的民族集団たることを選ぶのか、「漢人の兄弟」たることをかを選ぶのにもよる。これらの民族形成史の逸話のどれが史実で、どれが似非の歴史かを議論する必要は全くない。なぜなら羌人史の起源は歴史的問題であるのみならず、ナシヨナリズム・政治・イデオロギーの問題だからである。それはまさに漢代にもいえることで、現在の事例にも当てはまることである。

羌の事例が、歴史学と人類学の民族現象の理解の一助となったことについて、もう少し付言しよう。第一に本研究は、人類学的民族性理論の歴史研究への適用が歴史上の民族現象を理解する大きな助けとなることとして期待されると期待される。たとえば歴史家達は、民族集団を構成員自らの自己同定の分類とし、集団の境界を内名・外名や、イーミック・エティックの民族形成史の逸話を通じて画定されるものとする。それは民族的境界の形成と変化を検討するのに重要で、いくつかの文化的・身体的・言語的要素の「起源」を追い求めるより重要である。また集団の民族的境界の形成と変化は、これらの内名・外名の地理学的・人口学的意味の検討を通じて探究できる。その上、羌の場合にみられるとおり、民族形成史が暴露するのは必ずしも史実でなく、むしろしばしば民族系統を合理化するのに用いられる方法そのものであった。よって

歴史学者は、イーミック的・エティック的な民族形成史の研究を通じて、人間がいかに民族系統と長期的民族変化の中に自らを位置づけるのかを理解できる。最後に、羌の事例では以下の点がさらに明白である。すなわち、文化変容のみならず民族変化の点で「中国化」を定義する場合、非漢人の中国化の度合いをしめす最大のメルクマールは、非漢人がどれほど中国の言語、習俗、服装、もしくは他の文化的特色を受け入れたかどうかではなく、彼らが本当は漢人名士の末裔であることを「証明」する民族形成史を受け入れるか否かである。

人類学の側面からいえば筆者は、羌の事例が民族理論の正しさを支持するのみならず、識字文化で生きる人々の民族現象の複雑さの例を提供することを望む。一般に認められているように、人類学の民族現象に関する研究の大半は、歴史で文字で書き残すことのない人々、もしくは比較的短期間のみ文字史料に痕跡のある人々に関する民俗誌に基づいている。逆に、我々の事例のユニークさは、羌が三五〇〇年間にわたり継続的に漢文史料にみえるという点にある。本稿の事例のみが、伝統的人類学的学説の表象していないタイプの民族現象を観察できる。たとえば、民族的境界を画定する内名の力学は人類学者に注目されてきたが、「華夏」や「漢人」などの内名はその範囲の人々と歴史的变化について何も語らない。しかし外名の研究を通じて、これらの「他者」外名」を付与された人々間の民族的境界の変化がわかる。人類学者はこれ

までにも、民族性の主観的徴証たるイーミック的民族形成史の重要性に注目してはきたが、羌の事例は、エティック的民族形成史の逸話が民族間関係と同様に重要であることをしめしている。それらは、自分達と交流のある他者に関する観念を表象する。すなわち、「我々ではない彼らは何者か」、もしくは「彼らの劣性はいかに生まれたのか」を表象する。最後に、民族集団が民族間もしくは集団内部で形成されたとの考え方が広く受容されたとした場合、羌の事例では、民族呼称としての羌の地理学的・人口学的内包は時とともに漢人の成長に伴って拡大しており、羌人史が一部の非漢人の歴史というよりもむしろ漢人自身の歴史であったことをしめしている。本稿を終るにあたり、今後の諸研究が識字文化内の民族現象に向かい、また歴史家達と人類学者達の学際的研究が本課題に新しい光を投げかけてくれることに期待したい(完)。

注

- (1) 『後漢書』卷八七西羌伝。Scott, Margaret I. 1952. *A Study of the Ch'iang with Special Reference to Their Settlements in China from the Second to the Fifth Century A.D.* Ph.D. diss., University of Cambridge. Appendix1, p.2.
 (2) 『後漢書』卷八七西羌伝。スコット前掲書、Appendix1, pp.3-9.
 (3) 『後漢書』卷八七西羌伝。スコット前掲書、Appendix1, pp.9-10.
 (4) 『後漢書』卷八七西羌伝。スコット前掲書、Appendix1, p.11.
 (5) 『史記』卷一〇。

- (6) 顧頡剛「從古籍中探索我国的西部民族——羌族」(『社会科学戰線』一九八〇年第一期、第一一七—一五二頁)。
 (7) 許倬雲の主張は、羌と姜の関連を主張する諸説の中でも最も極端なものである。贅言するまでもなく、許倬雲はここで羌と姜を一つの音(Ch'iang)に訳している。羌と姜の関連については別の見解もありうるが、ともかく私としては、羌と姜を同一の人々だと信じ込ませる先学の方法は容認できない。
 (8) Hsu Cho-yun & Lindtzi, Kathryn M. (1988) *Western Chou Civilization*, New Haven and London: Yale University Press, pp.55-59.
 (9) 傅斯年「姜嫄」(『傅斯年全集』第三卷、聯経出版事業公司、一九七〇年、二二—三三頁。『中央研究院歷史語言研究所集刊』第二本第一分、一九二〇年初出)。
 (10) 馬長寿『氏与羌』(上海人民出版社、一九八四年、九一—九九頁)。
 (11) 冉光榮・李紹明・周錫銀『羌族史』(四川人民出版社、一九八五年、二六一—二七頁。訳者注——王氏は出版年を一九八四年とするが誤りか)。
 (12) Pulleyblank, E.G. (1983) *The Chinese and Their Neighbors in Pre-historic and Early Historic Times*, In: Keightley, David N. ed. *The Origins of Chinese Civilization*. Berkeley: University of California Press, pp.418-423.
 (13) 白川静「羌族考」(『甲骨金文学論叢』第九集、私家版、一九五八年)。
 (14) 馬長寿前掲書、第九一—一〇四頁。
 (15) 冉光榮・李紹明・周錫銀前掲書、第四四頁。
 (16) 白川静前掲書、第四五—一四四、一三三頁。
 (17) 傅斯年前掲書、第三〇—三三頁。
 (18) プーリーブランク前掲書、第四一八—四三三頁。
 (19) Ho Ping-ti. 1975. *The Cradle of the East*. Hong Kong: The Chinese

University of Hong Kong Press, p.345.

- (20) 鄭衡『夏商周考古學論文集』(文物出版社、一九八〇年、第三四三〜三五三頁)。
- (21) 考古学では民族単位について過去五〇年間にわたり、膨大な討論と付随的な理論的考察がなされてきた。以下はその概略である。一九五〇年代にビルマのカチン族の中で行なった調査に基づきエドモンド・リーチは、社会的単位は分類に対する主観的過程から生み出され、文化や人種といった客観的基準にはならないとした。はたして民族単位は観察者の基準によって定義されるべきか、原住民の視点にいよって定義されるべきか。この論争はかくして始まった。一九六〇年代になると、民族単位の客観的定義に関する学説史上の傑作²⁵であるRaoul Naroll, 1964. On Ethnic Unit Classification. *Currenty Anthropology*, vol.5, no.4, pp.283-291, 306-312 が、Moerman Michael, 1965. Ethnic Identification in a Complex Civilization: Who are the Luo? *American Anthropologist*, no.67, pp.1215-1230 によって批判された。フィールドでの経験に基づき、モエルマンは民族単位の客観的定義に対する説得的な批判を行なった。彼の視点はBarth, Fredrik ed. 1969. *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*. London: George Allen & Unwin に支持され、より手堅い形で確立された。この書籍の刊行は民族現象の研究が新しい時代に入ったことを象徴する。一九六〇年代と一九七〇年代には、「付随主義 (circumstantialism)」と「原理主義 (primordialism)」という二つのアプローチに沿った新しい議論が展開された。前者は民族性を従属的変数とみなし、外的興味と戦略の幅広い組み合わせによって創造され、コントロールされるとし、変化もしくは利用できるものとする。一方後者は、民族性を削減不能で、原理的な附着物に由来するものとする。以来、多くの研究はこの二つの研究の調和・超克を図っている。
- (22) モエルマン前掲書、第一二一九〜一二二〇頁。
- (23) Eberhard, Wolfram, 1968. *The Local Cultures of South and East China*. Alide Eberhard trans. . Leiden: E.J.Brill, p.2.
- (24) 『三國志』卷三〇烏丸鮮卑東夷伝の裴松之注所引の魚豢(三世紀)『魏略』。
- (25) 四川省編輯組『羌語簡志』(民族出版社、一九八一年、第二頁)、林向『羌戈大戰の歴史分析』(『四川大學學報叢刊』第二十号、一九八三年、八〜十六頁)。
- (26) モエルマン前掲書、第一二二五〜一二二七頁。
- (27) パース前掲書、第一四頁。
- (28) Hodder, Ian, 1978. The maintenance of group identities in the Baringo district, Western Kenya. *Social Organization and Settlement, BAR Supplementary Series*, no.47, pt.1. Oxford: British Archaeology Reports, p.58.
- (29) 鄭衡前掲書、第三三五〜三五二頁。
- (30) Stanislawski, M, 1978. If Pots Were Moral. In: Gould, Richard A. ed. *Explorations in Ethnoarchaeology*. Albuquerque: University of New Mexico Press, pp.201-228.
- (31) モエルマン前掲書、第一二二六頁。
- (32) たゞえば考古学では、研究者は考古遺物中のいくつかの文化要素をできるかぎり辿ることで羌の起源を探ろうとする。この研究方法の弱点は明白である。それは際限がない。もし十分な史料があれば、羌の起源は猿にまで遡りうる。実際に極端な例として、それを実行した研究者もいる。任乃強『羌族源流探索』(重慶出版社、一九八四年、第一〜十七頁)参照。しかしこれは民族単位の形成とは無関係である。
- (33) パース前掲書、第一二二〜一二四頁。Bentley, Carter G. 1987. *Ethnicity and Practice: Comparative Study of Society and History*, no.1, pp.24-25.; Nagata, Judith, 1981. In Defense of Ethnic Boundaries: The

- Changing Myths and Charters of Malay Identity. In: Keyes, Charles F. *Ethnic Change*, ed. Seattle: University of Washington Press, p.90.
- (34) Geertz, Clifford. 1973. *The Integrative Revolution: Primordial Sentiments and Civil Politics in the New States. The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books. pp.261-262.
- (35) Weber, Max. 1978. *Ethnic Groups. Economy and Society*. Roth Guenther & Wittich, Claus eds. Berkeley: University of California Press. p.389.
- (36) Leach, Edmund. 1954 (reprinted in 1964). *Political Systems of Highland Burma*. London: G. Bell & Sons.
- (37) Keyes, Charles F. 1981. *The Dialectics of Ethnic Change*. In: *Ethnic Change*, Charles F. Keyes ed. Seattle: University of Washington Press. p.8.
- (38) たとえば漢文史料によれば、漢代以後の河湟地区は党項羌と呼ばれる人々に占拠された。中国中世の歴史家達は彼らを羌とし、三苗の子孫だとした。一方、漢人歴史家も、彼らが猿の末裔と自称していたとする。これは党項羌のイミミック的民族形成過程論と解せる。党項羌は漢代羌の生物学的子孫かもしれない。また歴史家、言語学者、もしくは考古学者は漢代羌と党項羌の関連性をしめすいくつかの証拠を見出すかもしれない。しかし猿の視点からみれば、彼らは無弋爰劍の子孫を自称する羌人とは民族的に異なる。よって、エミミック的民族形成過程論が史実か否かを論ずる必要はない。それは古代人にとつての民族アイデンティティや民族変化について検討するための重要な情報を提供するものである。漢文史料中の党項羌については、『北史』巻九六、『隋書』巻八三参照。
- (39) スコット前掲書、七五〜一四〇頁。クレスピニー前掲書、九〇〜一二五頁。
- (40) 当該時代の渭水流域における民族モザイクに関する詳細な議論については、馬長寿『碑銘所見前秦至隋初的関中部族』（中華書局、一九八五年）参照。
- (41) 『晉書』巻十六。
- (42) 『晉書』巻十六所引『元和姓纂』に「党本出西羌。……自云夏后氏之後」に作る。
- (43) 馬長寿『碑銘所見前秦至隋初的関中部族』（中華書局、一九八五年、第八二〜八三頁）所収の歐陽脩『集古録跋尾』「隋鉗耳君清德頌」。
- (44) 漢羌戦争に関するものともよい参考文献は、de Crespigny, Rale. 1984. *Northern Frontiers: The Politics and Strategy of the Later Han Empire*, Canberra: Australian National University Press, pp.54-172。
- (45) 漢魏晉の時代に、羌の移住民は渭水流域の諸県に広く分散した。「羌村」や羌の姓をもつ人々が史料・詩・文学にみえる。羌の姓（時にそれらは羌村の名）の中でも、既述の黨・鉗耳・姚および、雷・同蹄・夫蒙・彌姐はもつとも著名な姓である。「鄧太尉祠碑」刻には、三つの羌人集団のみならず、羌の姓を冠する貢献者（その名前は刻字されている）もみえる。最後のデータは次のことをしめす。すなわち、漢人によって羌と呼称される人々は現在もそう自称しているかもしれない。馬長寿は四世紀〜六世紀の羌の移住民について探っている。馬長寿『碑銘所見前秦至隋初的関中部族』（中華書局、一九八五年、第六九〜八八頁）参照。
- (46) 馬長寿『碑銘所見前秦至隋初的関中部族』。
- (47) この状況は、インディアンと自称している北米原住民ときわめて類似する。
- (48) 林向『羌戈大戦的歴史分析』、八一〜八六頁。
- (49) Rin-chen Lhamo. 1926. *We Tibetans*. London: Seeley Service & Co.; Dalai Lama. 1962. *My Land and My People*. New York: McGraw-Hill

〔付記〕 本訳稿は、訳者の平成二四年度科学研究費補助金（研究課題「中国前漢後半期から王莽期の貨幣経済史」に関する研究」、番号24820055）による研究成果の一部である。

（著者・台湾中央研究院歴史語言研究所研究員・
中興大学歴史学系講座教授兼文学院院長）
（訳者・早稲田大学文学学術院助教）